慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	春秋時代の楚の王権について：荘王から霊王の時代
Sub Title	On the royal power of Chhu (楚) in Chhun Chhiu (春秋) Period
Author	安倍, 道子(Abe, Michiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.389- 410
JaLC DOI	
Abstract	中岡における春秋・戦国時代という分裂・抗争の時代に、揚子江中流域を中心として北方の中原諸国と対峙した南方の雄は楚であった。この楚に関する研究は、同時代の他国のそれに比べて著しく遅れている。しかし、その強大化、さらにこの時代を通して強国たることを維持し続け得た原因については、これまで何人かの研究がなされている。すなわち、その強大化については春秋初期よりのいくつかの政治改革を通して楚が君権の強大化・中央集権的官僚政治の実現を目指したことに帰因するという説が出され、またその強国たることを維持し得た原因として、王室が世族勢力の伸長を防止する処置を伝統的にとっていた、とする説が出されている。これらの研究は、その問題としているところは楚の強大化、またその安定性であってそれぞれ異なっているが、いずれも楚においては王の権力が世族の勢力を抑えていたという見方をとっているように思われる。しかし、楚に関する史料を見ていくと、楚の王権が強力であったという見方に疑問をいだかせるような記述にしばしばぶつかることがある。また楚における世族勢力の強大さを説く説もあり、中でも宇都木章氏は戦国時代の楚の世族を研究され、戦国時代後半まで一貫して楚の政権の枢要を占めて、その国力維持を計ってきたのは世族であり、王はこの勢力を温存し、その力を自己の権力下に繰り入れることによって権力の強化と維持を計った、と説いておられる。このように楚の王権、特に世族勢力との関係については殆ど相反するような見解が従来出されている小論は、このような現状の楚の王権という問題について、春秋時代のほぼ中期に当たる荘王から霊王の時代を取り上げて、この時代王というものが楚の権力構造の中で実際にはどのような位置にあり、その権力の大きさはどれ程であったのか、を考察しようとするものである。荘王から霊王までを特に取り上げたのは、この時期が春秋時代の王権と楚国内の謝勢力との関係に関して、極めて示唆に富む状況を示しているように思われるからである。なお、この時代を考えるに当たり、小論は『左伝』を中心とした。 It has been said that the royal power of Chhu kings in Chhun Chhiu period was dominant, but some historians say that the power of Chhu belonged not to the kings but to the nobility (世族). So in this paper, I examined the power of kings starting from the reign of King Chuang (荘) to that of King Li (霊).King Chuang overthrew one of the most powerful noble families, 若敖氏, and formulated the plan to concentrate the power to the royal family. But gradually the royal family had lost the reliance of 国人 of Chhu, and the nobility came to gain the power again. Then King Li tried to restore the power only to himself, but this trial was soon betrayed by the group who had gained the support of 国人. In a word, the royal power of this period of Chhu kings was not absolute but was under the control of 国人.
Notes	東洋史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0393

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

春秋時代の楚の王権について

――荘王から霊王の時代――

安倍道子

中国における春秋・戦国時代という分裂・抗争の時代に、揚子江中流域を中心として北方の中原諸国と対峙した南方の雄は楚であった。この楚に関する研究は、同時代の他国のそれに比べて著しく遅れている。[1] しかし、その強大化、さらにこの時代を通して強国たることを維持し続け得た原因については、これまで何人かの研究がなされている。すなわち、その強大化については春秋初期よりのいくつかの政治改革を通して楚が君権の強大化・中央集権的官僚政治の実現を目指したことに帰因するという説が出され、[2] またその強国たることを維持し得た原因として、王室が世族勢力の伸長を防止する処置を伝統的にとっていた、とする説が出されている。[3]

これらの研究は、その問題としているところは楚の強大化、またその安定性であってそれぞれ異なっているが、いずれも楚においては王の権力が世族の勢力を抑えていたという見方をとっているように思われる。しかし、楚に関する史料を見ていくと、楚の王権が強力であったという見方に疑問をいだかせるような記述にしばしばぶつかることがある。[4] また楚における世族勢力の強大さを説く説もあり、[5] 中でも宇都木章氏は戦国時代の楚の世族を研究され、戦国時代後半まで一貫して楚の政権の枢要を占めて、その国力維持を計ってきたのは世族であり、王はこの勢力を温存し、その力を自己の権力下に繰り入れることによって権力の強化と維持を計った、[6] と説いておられる。

このように楚の王権、特に世族勢力との関係については殆ど相反するような見解が従来出されている。

小論は、このような現状の楚の王権という問題について、春秋時代のほぼ中期に当たる荘王から霊王の時代を取り上げて、この時代王というものが楚の権力構造の中で実際にはどのような位置にあり、その権力の大きさはどれ程であったのか、を考察しようとするものである。荘王から霊王までを特に取り上げたのは、この時期が春秋時代の王権と楚国内の諸勢力との関係に関して、極めて示唆に富む状況を示しているように思われるからである。

なお、この時代を考えるに当たり、小論は『左伝』を中心とした。

一

これまでの春秋時代における楚の王権に関する研究において常に注目されてきたのは、春秋五霸の一人として名高い荘王（紀元前六一三～五九一）の時代である。それは荘王九年（魯の宣公四年、[7] 紀元前六〇五年）に、従来楚の王権の伸長と深い関わりを持つと考えられてきた、[8] いわゆる若敖氏の乱が起こっているためであろう。従って小論は、この若敖氏の乱を再検討することから、楚の王権についての考察を始めたいと思う。

若敖氏の乱とは、前述の如く荘王九年に、楚の王としては最初に『左伝』に登場する武王[9]（紀元前七四〇～六九〇）の祖父若敖より出た、王室と同姓で当時の楚における最大の世族である鬬氏と成氏[10]（この二氏をあわせて若敖氏とも呼ばれる）が荘王に対して乱をなし、敗れてそのほとんどが誅滅された事件（『左伝』宣公四年）である。これまでの研究によれば、この乱は楚王による鬬氏抑圧が原因で起こり、[11] その結果最大の世族である鬬氏、さらに成氏が倒れたことにより王権の強化がはかられ、楚の王室権力が確立した、[12] と考えられている。

『左伝』はこの乱について次のように記している。

令尹子文卒スルニ及ビ、鬬般令尹為リ。子越司馬ト為リ、蔿賈工正ト為ル。子揚ヲ譖シテ之ヲ殺シ、子越令尹ト為リ、己司馬ト為ル。子越又之ヲ悪ミ、乃チ若敖氏ノ族ヲ以テ伯嬴ヲ轑陽ニ圉ヘテ之ヲ殺ス。遂ニ烝野ニ處リ、将ニ王ヲ

攻メントス。王、三王ノ子ヲ以テ質ト為ス。受ケズ。漳澨ニ師ス。秋七月戊戌、楚子若敖氏ト皐滸ニ戦フ。…遂ニ若敖氏ヲ滅ス。（宣公四年）

ここに記されているのは事件の経過であって、直接にこの乱の原因は明らかにされていないが、まずこの若敖氏の乱の原因について考えたい。

この『左伝』の記事から分かることは、当時楚において、同じ鬬氏の中に対立があり、それがさらに鬬氏と、武王の兄蚡冒より出た蔿氏の蔿賈との世族間の争いに発展したことである。[13] すなわち、子越（鬬椒）は蔿氏の一人の蔿賈（伯嬴）と結んで令尹子揚（鬬般）を殺して自分が令尹となったが、その後に若敖氏を率いて蔿賈を殺した。この段階までは事件の経過だけを見るなら完全に世族内部の抗争であるこの事件が、何故王への叛乱へ発展したのか、『左伝』にはこの点の説明がなく、これまでの研究でもこの点の解明が今一歩明確さを欠いているように思われる。[14] それを明らかにするためには、この乱が起こる以前の荘王と若敖氏、さらに荘王と蔿氏の関係を考えることがまず必要であろう。

荘王と若敖氏との関係に関しては、次のような記述が『左伝』に見られる。

楚ノ荘王立ツ。、子孔、潘崇将ニ羣舒ヲ襲ハントス。公子燮ト子儀トヲシテ守ラ使メテ舒蓼ヲ伐ツ。二子乱ヲ作シ郢ニ城キ、賊ヲシテ子孔ヲ殺サ使ム。克ハズシテ還ル。八月、二子楚子ヲ以テ出デ、将ニ商密ニ如カントス。（文公一四年）

これは荘王即位の年、公子燮と子儀（鬬克）が乱を起こして時の令尹子孔（成嘉）を殺そうとしたが失敗し、二人は荘王をつれて商密（河南省淅川県西）[15] に行こうとした、というのである。[16] 同年の『左伝』によれば乱の原因は公子燮と子儀二人の不満のためとされているが、[17] これから推測されることはたとえ『国語』が伝えるように荘王が当時幼弱でまた公子燮と子儀が共に王の傅と師であったとはいえ、[18] 乱を起こした人間に容易につれていかれる程王が実際上は軽い存在であったこと、また乱を起こした二人が令尹子孔（成嘉）を殺そうとしたのは、この二人の不満が令尹子孔に向けられていること、

すなわち時の実権を握っていたのは令尹子孔であったこと、この二点ではなかろうか。すなわち、ここでも同じ若敖氏の中で子孔（成嘉）と子儀（闘克）が対立しているが、この若敖氏はこれまで令尹職をほぼ独占してきた大世族であり[19]この荘王時代も年少の王のもとで実権を握っていたものと思われる。

このような状況の中で注目すべきは『史記』楚世家の伝える話である。それによると、荘王は即位後三年淫楽にふけって一切政治を顧みなかったが、伍挙・蘇従といった大夫に諫められて「是ニ於テ乃チ淫楽ヲ罷メ、政ヲ聴キ、誅スル所ノ者数百人、進ムル所ノ者数百人」といった積極姿勢に転じ、伍挙・蘇従に政を任せ、この年庸（湖北省竹山県東南）を滅ぼした、とある。[20]これは先の『左伝』文公一四年の条と併せ考えてみると荘王が三年間淫楽にふけり政治を行なわなかったとは、若敖氏の下に政治の権力から遠ざけられていたことを反映しているのではないか、と考えられる。[21]さらにその荘王が大夫を使って積極的に政に乗り出したとは、この『史記』の伝える伍挙・蘇従はそのまま信じることはできないが、[22]荘王が自分に与する大夫を使ってそれまでの全く若敖氏の思うままにされていた状況を脱して主体的に動き始めたことを示しているように思われる。そして『史記』に見えた「この年庸を滅ぼした」事件に大きく関与しているのが、『左伝』によれば蔿賈であった。

すなわち、荘王三年、楚の飢饉に乗じて戎（山夷）、庸、麇（湖北省鄖県）などの諸勢力が楚を伐った際、一時的にこれを逃れて阪高（会箋によれば湖北省襄陽府西境）へ移ろうとした「楚人」[23]の案に反対して庸を伐つことを主張したのは蔿賈であり、結局この蔿賈の主張に従って庸が滅ぼされ、それによってこの楚の危機は乗り越えられた、しかも、この庸を伐つに当たって「王卒」も使用できる状況であったことは、王がこの蔿賈を支持していることを示すものであろう（以上一連の出来事は『左伝』文公一六年）。さらにまた、若敖氏の乱の後令尹となった蔿艾猷（孫叔敖）が蔿賈の子供と言われていること[24]などから、荘王と蔿賈の親密な結びつきがうかがえるのではあるまいか。

以上述べてきたことから、若敖氏の乱以前の楚では王を凌ぐ程の力を持った若敖氏[25]と、それに対抗するようにしだいに

台頭してきた王＝蔿賈ラインとでも言うべき二つの勢力が存在していたように思われる。

では、従来考えられていた如く、若敖氏の乱をひき起こす程王は積極的に鬬氏抑圧を行なったのであろうか。先に記した『史記』楚世家の「誅スル所ノ者数百人」の句を鬬氏削弱に関連するとする説もあるが、[26]これを裏付けるに足るだけの史料は見当たらないように思われる。むしろ若敖氏の乱を記した先に引用の『左伝』宣公四年の条に、若敖氏が王を攻めようとした時、王は三王（杜注によれば文、成、穆）の子を人質にしようとした、とあることに注目したい。この人質を拒絶され止むなく戦うに至ったのであって、ここに見える王は極めて受動的である。もし従来言われてきた如く王が積極的に鬬氏抑圧を行なっていたとするならば当然王には鬬氏と戦うだけの力も、またその準備も覚悟もあったはずであり、それから見るならばこの王の態度は極めて不自然と言わなければならない。

すなわち、これらから考えるに荘王は若敖氏の対抗勢力である蔿氏の蔿賈と結んで、実質的に政権を掌握していたと思われる若敖氏に対抗して、自発的に動こうとしていた。しかし、その力はまだ鬬氏を積極的に抑圧していくだけのものにはなっていなかったように思われる。従って若敖氏の乱が王による鬬氏抑圧のために起こったとする従来の説には承服し難いのである。では一体若敖氏の乱とは何であったのか。

この乱は、台頭してきた王＝蔿賈ラインを抑えつけようとした若敖氏の意図によったものではなかろうか。すなわち、前述の如く子越（鬬椒）は蔿賈の協力を得て令尹子揚（鬬般）に取って替わったが、その後蔿賈を殺す場合に『左伝』宣公四年の会箋はその理由を「椒既ニ令尹ト為リ、又蔿賈ノ己ニ偪ルヲ悪ムナリ」と解しているが、単に鬬椒と蔿賈だけの問題であったなら同年の本文に「乃チ若敖氏ノ族ヲ以テ」とある如く、先に見たように中に派閥的対立を抱えた若敖氏全体が鬬椒に従って動いたであろうか。これはやはり単なる個人間の問題を越えた、若敖氏全体に関わることであったためではなかろうか。すなわち若敖氏の乱とは、実権を握っていた若敖氏が対抗勢力として台頭しつつある王＝蔿賈ラインをつぶすべく戦いを起こした政権鬬争であったのではあるまいか。若敖氏と蔿賈の抗争という単なる世族間の争いに見えた

ものが、王への叛乱へと発展したのはこのような事情によるものと考えられる。[27] そしてさらに、若敖氏にとっては蔿賈と結ぶ王は除く必要があったために、先に見た如く王からの人質を受けることを拒絶したのではあるまいか。

ただ、ここにおいて蔿賈の背後で蔿氏がどれ程動いていたのかは史料からは何も知ることができない。しかし代々楚最大の世族であった若敖氏[28]を王が敗ったことから、王側に蔿氏の援助があった可能性はあると思われる。

これまで若敖氏の乱の原因を考えてきた。その結果は王側の勝利に終わり、王にとって最大の政権への障害であった鬬氏・成氏が倒れた。これにより従来の王の意向に沿って、王権強化の動きが見られることは想像に難くない。そしてここに令尹として登場するのが蔿艾猷（孫叔敖）である。

『左伝』は宣公一二年に晋の随武子の口を通してこの蔿艾猷（孫叔敖）の政治を伝えている。それによれば、法令典憲を選択して、軍を五部に分け、軍政を徹底させ、さらに王が任官する際の方針を定め、老人を優待し、他国からやって来る人には賜与し、さらに上下の身分秩序を明確化させた、と言われている。この一連の政策のうち、特に王権の問題と深く関わるのは任官の制度であると思われる。

其レ君ノ挙グルヤ、内姓ハ親ニ選ビ、外姓ハ旧ニ選ビ、挙ハ徳ヲ失ハズ、賞ハ労ヲ失ハズ。（『左伝』宣公一二年）

これは王と同姓（芈）の場合は血縁の近い者を、異姓の場合は旧来の家の者を選ぶ、さらに有徳者は官に任じ、功労者は賞する、という制度である。

確かに若敖氏の乱以後、『左伝』だけを見ても、荘王一六年に宋を伐ち、一七年の晋との邲[29]の戦いで軍を率いた荘王の弟の公子嬰斉（子重）（宣公一一・一二年）、同じく邲の戦いで軍を率いた公子側（子反）（宣公一二年）など公子の活動が目立ち始める。特に公子嬰斉（子重）は左尹という令尹に次ぐ位[30]についている（宣公一一年）。このように、従来それ程目立った働きの見えない公子群[31]が台頭してきたことは先の「内姓ハ親ニ選ビ」という方針に因ったものではないかと考えられる。またさらに、潘尪（文公一六、宣公一二年）、申叔時（宣公一一・一五年）、伍参（宣公一二年）などといった

旧来の大世族以外の人々が史料に現われ、注目をあびてくるのもこの時代の新しい任官制度に因ることが考えられる。

これまで見てきた令尹蔿艾猃によるこの任官制度は、全体の方向としては確かに王権の強化を目指すものであろう。そして、そのねらいとして二つの事が考えられるように思われる。すなわち一つは、それまで鬬氏・成氏を中心とした大世族がほぼ独占していた権力を、より王の近親の公子群へ移すことによって王の権威を高めることをねらう。[32] さらにもう一つは「挙ハ徳ヲ失ハズ、賞ハ労ヲ失ハズ」により、有徳の大夫を任用することによって楚の国人層を納得させ、それによって一層新しい政権担当層の安定をはかったことである。[33] たとえば前述の潘尫（師叔）について『左伝』宣公一二年に「師叔ハ楚ノ崇ナリ。」の杜注が「師叔ハ潘尫ナリ。楚人ノ崇貴スル所為リ。」と述べているのはこの推測を裏付けるものである。

さらにまた蔿艾猃の政の一つ身分秩序の明確化は

君子小人、物ニ服章有リ貴ニ常尊有リ。賤ニ等威有リ。（『左伝』宣公一二年）

と書かれているが、これも楚の伝統的社会秩序を確認し、徹底させることによって大夫や国人層を納得・安定させることを意図したものではないかと思われる。

すなわち、これまで見てきた如く、若敖氏の乱の後、蔿艾猃によってそれまでの世族から公子群への権力の移行がはかられた。ただそれは言わば「王を取り巻く形の世族政権」から「王を取り巻く形の公子群政権」への動きであって、決して王個人への権力の移行ではなかったと思われる。[34] さらに、そこには国人層を納得させるための配慮もなされていた。増淵龍夫氏は、春秋時代の「国」には共同体的側面が残っており、そのため公（きみ）や卿は国人を靖んずることにつとめねばならず、その配慮をおこたれば、国人の批判と背反に当面しなければならなかった、[35] と説いておられるが、この蔿艾猃の政策は、当時の楚国という状況の中で許容される範囲の、言わば条件付きの王権強化策であったと言えるのではあるまい・か。

ただ、こうした動きの一方、旧来の大世族勢力も全く権力から遠ざけられたのではなかった。すなわち、楚の中原への進出の要地である申（河南省南陽県北）の県尹、申公巫臣は大世族屈氏[36]の出であり、また荘王の信任も極めて厚かった[37]。

こうした状況の中で、次の共王が即位することになる。

二

荘王の死後王位についたのは子の共王（紀元前五九〇～五六〇）である。即位の時、『左伝』の記述から考えるに共王はまだ十才程であった[38]。

この王のもとで令尹に就任したのは荘王時代から活躍していた、荘王の弟の公子嬰斉（子重）であり、さらにその後、穆王（紀元前六二五～六一四）の子の公子壬夫（子辛）、荘王の子の公子貞（子囊）と王の近親によって受け継がれた。また「司馬ハ令尹ノ偏ニシテ、王ノ四体ナリ」（『左伝』襄公三〇年）と言われた司馬の職についているとして『左伝』にその名が見える者も、公子側（子反）（宣公一六年）、公子申[39]（襄公二年）、公子何忌（襄公三年）、荘王の子の子庚（襄公一二年）であり、この時代令尹・司馬の職が公子群に独占されていたことが分かる。すなわちこれは、荘王時代から始まった「公子群政権」への動きが、この時代に一つの頂点に達したと見ることができるであろう。

そしてこの公子勢力は、共王の即位後すぐ前述の申公巫臣の族を伐った。巫臣自身はこの時既に晋に奔っていたが[40]、

子重・子反、巫臣ノ族子閻・子蕩及ビ清尹弗忌ヲ殺シ、襄老ノ子黒要ニ及ブ。而シテ其ノ室ヲ分ツ。子重子閻ノ室ヲ取リ、沈尹ト王子罷トヲシテ子蕩ノ室ヲ分ケ使ム。子反黒要ト清尹トノ室ヲ取ル。（『左伝』成公七年）

とある。『左伝』は荘王時代以来の子重・子反と巫臣との対立を伝えているが[41]、ここに見る限り巫臣の族を伐ったのは子重・子反ばかりではなかったことが分かる。すなわち、この事件は公子勢力による、申公という要職にあり、屈氏という大世族を背後に持つ巫臣勢力の排除であったのではなかろうか。

以上の如く対抗勢力を排除し、要職を独占した公子群であったが、この中にあって王の力はどれ程であったろうか。

共王時代の外征を見ると、王自身が軍を率いた記録が先の荘王に比べて少なく[42]、それに反して子重・子反・子辛・子囊などが中心となった場合が圧倒的である[43]。この時代、外征の中心は完全に王ではなく、公子群であったように思われる。

さらに共王一二年（魯の成公一二年）、楚は宿敵晋と宋の西門外で盟するが（『左伝』成公一二年）、この盟に至る経過は

宋ノ華元令尹子重ニ善ク、又欒武子ニ善シ。楚人既ニ晋ノ糴茷ニ成ヲ許シテ帰リテ復命セ使ムト聞ク。冬、華元楚ニ如キ、遂ニ晋ニ如キ、晋楚ノ成ヲ合ス。（『左伝』成公一一年）

とある如く、これ以前より晋楚相方に成を求める動きがあったが[44]、具体的に両国の盟にもっていったのは楚の令尹子重と晋の欒武子とに親しい宋の大夫華元であった。これは、今楚に限って見るならば、楚の政策決定に令尹子重が大きく関与していることをうかがわせるものであろう。

これまで見たように、共王時代、外征を含めて楚の政治は公子群の手に握られ、王はその公子群の中にあってあまり目立つ存在ではない。先の荘王の春秋五霸の一人に数えられるような華々しさと比べて、この原因はどこにあるのであろうか。

まず考えられるのは、前述の如く共王が年少で即位したことである。そのため、年長の近親の公子達に頼らざるを得なかったという状況である[45]。第二の原因は、既述した如く蔿艾猃による王権強化策が王個人への権力集中をはかるものではなかったことであろう。すなわち、荘王の場合は先に述べた如く政治に対して積極的であり、しかも大世族若敖氏が倒れた後の、一種の権力の真空状態とも言える中で、自らが蔿艾猃に託する形で改革を行なわせたのであるから、王が公子群より一歩抜き出ることは可能であった。しかし、そうでない場合、特に共王のように年少で即位した場合、王は公子群の中に埋没してしまうように思われるのである。

このように実権を握った公子群の内部にも激しい対立はあったようであるが[46]、しかしやがてその内部における対立相手よりさらに強力な勢力が公子群を揺るがすこととなる。

楚ノ公子申右司馬為リ。多ク小国ノ賂ヲ受ケテ、以テ子重・子辛ニ偪ル。楚人之ヲ殺ス。（『左伝』襄公二年）

楚ノ子重呉ヲ伐ツ。為ニ之ガ師ヲ簡ブ。…鄧廖ヲシテ組甲三百被練三千ヲ帥ヰ使メ以テ呉ヲ侵ス。呉人要シテ之ヲ撃チ、鄧廖ヲ獲タリ。…呉人楚ヲ伐チ駕ヲ取ル。駕ハ良邑ナリ。鄧廖モ亦楚ノ良ナリ。君子子重ヲ謂フ。是ノ役ニ於テ獲タル所ハ亡ヒシ所ニ如カズト。楚人是ヲ以テ子重ヲ咎ム。子重之ヲ病ミ、遂ニ心疾ニ遇ウテ卒ス。（『左伝』襄公三年）

楚人陳ノ叛ケル故ヲ討ム。曰ク令尹子辛ノ実ニ侵欲セルニ由ルト。乃チ之ヲ殺ス。（『左伝』襄公五年）

以上の三例は、共王二〇・二一・二三年（魯の襄公二・三・五年）に右司馬公子申・令尹子重・令尹子辛が楚人によって殺されたことを伝えている[47]。令尹子重の場合は他の二例と異なり、楚人が直接殺したわけではないが、子重に圧力をかけ死に追いやったと見ることができよう。これはまさに増淵氏が春秋時代の「国」について「支配者層である公や卿の平常の行動が、兵力の基幹である国人を靖んずるに十全でない場合、公や卿は国人の批判をうける。」[48]と述べておられることを想起させる。すなわち公子申や令尹子辛の貪、令尹子重の呉との戦いにおける失政が楚人（後述の『左伝』襄公一五年の記述と併せ考えこの場合は国人とほぼ同義と考えて良いと思われる）[49]の叛を招いたのである。この後、子囊（公子貞）が令尹となり（『左伝』襄公五年）一時的にこの国人層の不満は静まっていたように思われるが[50]、紀元前五五九年（魯の襄公一四年）楚は前年の庸浦[51]の戦いの勝利に乗じて呉を伐ったが大敗を喫し（『左伝』襄公一四年）、これがまた国人層の大きな批判を招いたようである。この年、前年の共王の死にともない、子の康王（紀元前五五九～五四五）が即位している。

この呉との戦いにおける敗北が国人の批判を招いたことは、翌康王二年に

楚、公子午ヲ令尹ト為シ、公子罷戎ヲ右尹ト為シ、蔿子馮ヲ大司馬ト為シ、公子槖師ヲ右司馬ト為シ、公子成ヲ左司馬

ト為シ、屈到ヲ莫敖ト為シ、公子追舒ヲ箴尹ト為シ、屈蕩ヲ連尹ト為シ、養由基ヲ宮廄尹ト為シ、以テ国人ヲ安靖ス。

（『左伝』襄公一五年）

とあることから容易に理解されよう。すなわち、ここにおいて軍事に関する大官である大司馬や莫敖[52]に蔿子馮と屈到といった旧来楚に大きな力を持っていた大世族を就け、さらに『左伝』襄公一三年の条に呉を敗ったことの見える養由基を任用するなど軍事面の拡充の意図がうかがわれ、「以テ国人ヲ安靖」したとあるからである。特にここに再び蔿氏や屈氏という大世族が楚の政治の中枢に復帰してきたことは注目する必要があろう。それは、これら大世族が若敖氏の乱以後政治の表面に殆ど登場しなくなったとはいえ、その持つ勢力・軍事力は依然として大きく[53]、国人が公子群に代わって実力あるこれら大世族の復帰を求めたのではあるまいか。さらにこれにより、国人とこれら大世族との関係が良好であったことも知ることができる。またこのことから考えるに、先に令尹子重・子辛・右司馬公子申を殺した「楚人」という言葉の概念には、国人ばかりでなく世族も含まれているように思われる。

これまで見てきたように、公子群政権に対する国人の批判・非難は共王二〇年ごろから高まり、ついに康王即位二年目にその政権の一部を大世族に渡すことを余儀なくさせたように思われる。これはまた、蔿艾猲の改革（任官制度の面）が挫折したことを示すものであろう。そしてそれを挫折させたのは、国人が公子群の失政や貪欲さを見限って、大世族に就いたためであった。

こうした状況の中で、康王は国人の意を迎えるのに汲々としており[54]、八年には令尹子庚（公子午）の死にともない、薳子馮（蔿子馮）[55]を令尹にしようとする（『左伝』襄公二一年）。この時は薳子馮は相談した申叔豫に「国寵多クシテ王弱シ。国為ム可カラザルナリ。」と言われ辞退した（『左伝』同年）が、この言葉は王が弱く、公子と大世族が鎬をけずっている当時の状況をよく示していると思われる。

薳子馮の辞退により、王は公子追舒（子南）を令尹とした（『左伝』襄公二一年）。しかし、早くも翌年

楚ノ観起令尹子南ニ寵有リ。未ダ禄ヲ益サザルニ馬数十乗有リ。楚人之ヲ患フ。王将ニ討ゼントス。子南ノ子棄疾王ノ御士為リ。王之ヲ見ル毎ニ必ズ泣ク。…王曰ク、令尹ノ能カラザルハ爾ノ知ル所ナリ。国将ニ討ゼントスト。…王遂ニ子南ヲ朝ニ殺シ、観起ヲ四竟ニ轘ス。（『左伝』襄公二二年）

とある如く、観起という大夫を偏寵したため子南は殺された。この事件について野間文史氏は、子南にとって観起は官僚体制を生むための重要な人的基盤である私臣であり、私臣を養うという当時の楚の風潮に対するこの殺害は楚王の警告であったのではないか、と述べられた。[56] しかし、この『左伝』の文を読むと、王が子南と観起を殺すに至ったのには、「楚人之ヲ患フ」の楚人の意志が強く関与しているように思われる。[57] さらに『左伝』の同年の条によれば、子南の死後令尹になった薳子馮も八人の寵する者を持っていたが申叔豫に子南の例をあげて諫められ、この八人を放逐した、その後に『左伝』は「而シテ後王之ヲ安ゼリ」と続けている。

これらから考えるに、観起や薳子馮の八人は確かに野間氏が指摘されたように私臣の類ではなかったかと考えられる。ただ、この私臣に対しては野間氏が言われるように王ばかりでなく、さらに大夫・国人も批判的であったように思われる。すなわち、王にとっては令尹が私臣を持つことによって一層その権力が増大することが危惧され、大夫・国人にとっては伝統的な宗法的身分秩序体制への抵触になることが理由として考えられるのではあるまいか。[58]

こうして子南が私臣を持ったことによって殺害された後、王は既述した如く薳子馮を令尹とし、さらに公子齮を司馬、屈建（子木）を莫敖に任じた（『左伝』襄公二二年）。先に辞退した薳子馮がこの時は令尹に就任したのは子南の死によって楚における権力分布が自らに有利になったためであろうか。

こうして康王九年（魯の襄公二二年）、令尹職は再び大世族の手に移り、楚はここにまた公子群政権から大世族の政権に戻ったと言うことができよう。この後、康王一二年に薳子馮が死ぬと、屈建（子木）が令尹、屈蕩が莫敖、蔿掩が司馬となり（『左伝』襄公二五年）、この傾向は一層強まったのである。

三

康王を継いで王位についたのは、子の郟敖（紀元前五四四～五四一）である。そして令尹には前年の子木（屈建）の死をうけて康王の弟の王子圍が就任した[59]（『左伝』襄公二九年）[60]。この新しい王と令尹の力関係が圧倒的に後者優位であったことは『左伝』が様々の人物の口を通して語らせている[61]。

やがて紀元前五四一年（魯の昭公元年）、令尹圍は郟敖を弑して霊王（紀元前五四〇～五二九）として楚王の位につき、薳罷を令尹、薳啓彊を大宰に任じた（『左伝』昭公元年）。この薳罷が令尹に就任した裏には、

穆叔大夫ニ告ゲテ曰ク、楚ノ令尹将ニ大事有ラントス。子蕩将ニ与リテ之ヲ助ケントスト。（『左伝』襄公三〇年）

とあるように、霊王の王位簒奪に子蕩（薳罷）が協力したという事情があったらしい。

こうして位についた霊王は、これまでの目立たない存在であった共王・康王と打って変わって積極姿勢に転ずる。まず、王は自分に対抗する（し得る）勢力の除去・削弱を行なう。

郟敖を弑した時、

遂ニ其ノ二子幕・平夏トヲ殺ス。右尹子干出デテ晋ニ奔リ、宮廏尹子皙出デテ鄭ニ奔ル。大宰伯州犂ヲ郟ニ殺ス。（『左伝』昭公元年）

と記される如く、郟敖の二子を殺し、さらに自分の弟の子干（公子比）と子皙（公子黒肱）をそれぞれ晋と鄭へ出奔に追いこんでいる[62]。このように血縁の近い者を除き、さらに霊王は大世族には削弱策で臨む。

すでに令尹時代に、時の大司馬蔿掩を殺してその財産を奪っていたが（『左伝』襄公三〇年）、即位後薳居の田を奪い、若敖氏の乱での誅滅を免れた鬬氏の血統の鬬韋亀の邑とその子の鬬成然（蔓成然）の邑をも奪って、成然を郊尹とした（『同』昭公一三年）[63]。さらに呉に二心ありとして屈申を、また讒を信じてやはり若敖氏の乱で誅滅を免れた成氏の血筋の

成虎を殺している（『同』昭公五・一二年）。

しかし、一連のこのような動きの一方、前述の如く遠罷・遠啓彊を令尹・大宰に任じ、また『左伝』昭公五年の条で屈生を莫敖とするなど、一概に反大世族の立場に立つのではなく、大世族内の派閥対立などを巧みに利用して自分につく者はその力を利用したのではないかと思われる。

このような対抗勢力の削弱・除去は相対的に王権の強化へつながるものであるが、霊王はさらに積極的に王権強化へ乗り出したようである。そしてその政策は、荘王時代の蔿艾猷による強化策の限界を越えた、すなわち当時の楚の宗法的身分秩序の体制を破って、王個人への権力の集中を意図しているように思われる。

まず霊王は「章華の宮」[64]を建て、ここに亡人を収容した（『左伝』昭公七年）。同年の『左伝』から、ここは王宮の中の扱いとなりここに入った者には王以外の外部の人間は手出しできなかったことが分かる。すなわち、この章華の宮とはここに入った者はそれ以前の宗法的身分を捨て、王との全く個人的な主従関係が成立する、言わば王の私臣が誕生する場であったのではなかろうか。それ故に、『左伝』同年の条で芋尹申無宇が十等の身分秩序を破るものと攻撃しているのであろう。

さらにこの時代、霊王の近くにいて進言したり、相談を受けたりしている伍挙[65]は、増淵氏が春秋中期ごろから世族の強大な権力に対抗して君権の強化をはかろうとする君主たちがあつめていたと述べておられる「側近侍衛の家臣」[66]に当たるのではなかろうか。

こうして霊王はその政治に私臣としての亡人、さらに伍挙のような側近を用いたようである。

また、このような任官に関して言えば、霊王を倒して王位についた平王（紀元前五二八～五一六）が「廃官ヲ脩ム」[67]という政策をとっていることから見て、霊王はそれまであった官職を廃止するなど、制度的にも変革を行なったことが分かる。

霊王時代にまた著しく見られるのは、国を滅ぼして県としたり、また国を他所へ遷すという政策である。

まず、霊王三年には頼（湖北省隨県北）を滅ぼしてこれを鄢（河南省鄢陵県）に遷し、さらに許（元来は河南省許昌県の地であったが楚の共王時代、鄭を恐れて現在の河南省葉県の葉に遷っていた）を頼に遷そうとした（『左伝』昭公四年）。また七年には陳を滅ぼして県とし（『同』昭公八年）、八年には許を夷（安徽省亳県東南の城父のこと）に遷してこれに州来（安徽省鳳台県）と淮北の田を取って与え、城父の人を陳に遷してこれに夷の濮水の西の田を与え、さらに方城外の人を許（許が夷に遷るまであった葉のこと）に遷している（『同』昭公九年）。さらに十年には蔡を滅ぼして県とした（『同』昭公一一年）。また許、胡・沈（共に安徽省阜陽県西北）、道（河南省確山県東北）、房（河南省遂平県）、申（河南省南陽県北）を楚[68]に遷したという（『同』昭公一三年）。

このように国を県とし、あるいは他所に遷すやり方はいずれもその国の氏族秩序を危機に陥らせるものであり、特に県とする場合は氏族秩序の中核は破壊される。要地を県とし、そこに県尹を派遣して治めることはかなり以前より行なわれていたが[69]、ついに中原の陳や蔡という国々にまでそれが及んだことは、諸国に与えた衝撃の大きさは量り知れないものがあったであろう。さらに霊王は、蔡を滅ぼした際、その隠大子を祭の犠牲にするという非礼をも行なったのである（『左伝』昭公一一年）。

以上見てきた如く、霊王の政治は任官の面においても、また征服した地の支配方法においても、従来の伝統的な氏族制的体制を否定するものであった。そしてそれ故に、集権的官僚体制を生み出していく方向性を持ったものであったと言えよう。ここにおいて、霊王の諸策は蔿艾猃の王権強化策を一歩越えたものであった。

しかし、『左伝』はこの霊王に対しての宗法秩序を重んじる人々の非難を多く記しており[70]、この諸策が国の内外の批判の的になっていたことを伝えている。

ついに霊王一二年（魯の昭公一三年）、霊王が乾谿（安徽省亳県東南）に滞在しているその留守に、公子比（子干）・公

子黒肱（子皙）・蔡公（蔡の県尹）の公子棄疾・蔓成然（鬬成然）・蔡の朝吾が陳・蔡・不羮[71]・許・葉の軍を率い、遷氏の族・許圉・蔡洧・遷居の族[72]の呼応を受けて楚に入った（『左伝』昭公一三年）。すなわちこれは、霊王によって追われたり、削弱策を蒙った楚国内の勢力と、同じく霊王によって国を滅ぼされたり、遷されたりした楚以外の勢力[73]との連合であった。この状況において注目すべきは

右尹子革曰ク、請フ郊ニ待チテ以テ国人ニ聴カント。王曰ク、衆ノ怒リハ犯スベカラザルナリト。（『左伝』昭公一三年）

という霊王と右尹子革（然丹）[74]との会話である。すなわちこの子革の言葉から、本拠地を取られ、さらに乾谿に率いていた軍にも見捨てられた王[75]ではあるが、国人がどちらに付くかにより形勢の逆転が可能であったことが分かる。まさに国人層の去就が勝敗の鍵を握っているのである。そしてこの時の霊王の言葉を増淵氏は、衆（国人）の怒りを犯して、禍が身にふりかかってから、衆の怒りの恐ろしさをはじめて知った者の言、と述べておられる[76]。霊王はこの時、国人が自分に味方しないことを知っており、この子革の勧めを斥けた。ここにおいて霊王の敗北は決定し、この後王は自殺して果てる[77]。先の共王から康王の時代、国人が公子群を見限って大世族に付いたことにより、再び政権が大世族に戻ったように、ここにおいても叛乱の成功はこの国人層の支持によって決定したのである。それ故に支配者層にとってこの国人の力は、それを靖んじているうちは自分の地位・権力を保証するものであるが、一段その支持を失うと「衆ノ怒リハ水火ノ如シ」（『左伝』昭公一三年）という諸刃の刃であった。そして、それをまさに巧みに利用して子干と子皙を自殺させ、王位についたのが公子棄疾であった[78]。それが平王（紀元前五二八～五一六）である。

『左伝』昭公一三年の伝える所によれば、即位後、平王は直ちに偽の霊王の遺体を葬むって国人を靖んじ[79]、霊王によって県にされた陳と蔡を再立し、蔡の隠大子の子の廬を蔡に、陳の悼大子の子の呉を陳に帰して、蔡と陳の従来の氏族秩序を回復させた。さらに霊王によって遷された邑の人々を本来の地に帰し、廃止された官職を復している。すなわち、これ

は明らかに霊王によって破られた氏族秩序の復旧であった。そしてこれが国人の意向に沿うことであったことは確かであろう。

ここにおいて、従来の宗法的身分体制を破り、それによって王個人への権力の集中をはかる霊王の意図は、霊王自身の死と、平王による霊王以前の状態への復帰策とによって挫折した。そしてそれを挫折に追いこんだのは、直接には公子・世族による叛乱であったが、その叛乱を支持し成功させた国人層の力が大きかったのではないか、と思われる。

四

小論は始めに述べた如く、荘王から霊王の時代、王というものが楚の権力構造の中で実際にどのような位置にあり、その権力の大きさはどれ程であったのか、を考察せんとしたものである。

これまで述べてきたことからして、春秋時代楚の王権は強力であったと一概に言うことは決してできないことは明らかであろう。すなわち、この論で扱かった時代では荘王時代と霊王時代に王権の強化がはかられたことは事実であるが、そのいずれもが長期間に渡って継続・発展することなく挫折している。荘王時代の王権強化策から生まれてきた公子群政権は国人の力を背景にした大世族の前に潰え、霊王による強化策は荘王時代のそれをさらに一歩進めたものであったがこれも国人層の支持を受けた公子・世族らの勢力の前に中断・挫折した。すなわち、この二度にわたる王権強化の試みはいずれも国人の支持を得られなかったことにより失敗したと言える。

王個人の権力の増大とは、氏族制的体制を否定する上に生まれてくるものであり、それは増淵氏の言葉を使えば「国」から共同体的側面を奪っていくことであろう。この時期の楚において、その試みが国人の力を背景とした公子・世族によって挫折させられたことは、当時の楚という国がこの共同体的側面をまだ強固に持っていることを示すものと思われる。従って政権は時の国人の支持を受けた世族群や公子群が王を取り巻く形で握り、王個人の権力の強化は困難であった。

荘王以前の状況についてはほぼこれと同様の傾向であったと考えられるが[80]、これ以後の楚の王権を考える際も、まさに楚に強固に残るこの共同体的側面の推移が、この問題解明のための一つの大きな鍵であることはまちがいないことであろう。

註

(1) その国をつくっていた民族の系統についてもまだ定説は出ず、さらにその国家構造や権力構造といった基本的な問題もまだほとんど論じられていない状況である。

(2) 山崎道治「春秋時代楚国の政治改革」(『古代文化』二四―一一、一九七二)

(3) 野間文史「春秋時代における楚国の世族と王権」(『哲学(広島哲学会)』二四、一九七二)。ただし、野間氏は楚の王権が安定していた理由をすべてこれに帰しているわけではない。

(4) 「叔豫曰ク、国寵多クシテ王弱シ。」(『左伝』襄公二一年)
「楚ノ政ヲ執ル者衆クシテ乖キ、適トシテ患ニ任ズル莫シ。」(『同』昭公三〇年)

(5) 楊寛『戦国史』(上海人民出版社、一九五五)七八頁
宇都木章「戦国時代の楚の世族」(『中国古代の社会と文化』東京大学出版会、一九五七所収)

(6) 宇都木章「前掲論文」二九～三〇頁(ただし全体の通し頁では二〇七～二〇八頁)

(7) 以後、楚王と魯公の年代の対照は特に断わらない限り『史記』十二諸侯年表に従う。

(8) 山崎道治「前掲論文」二一八頁

(9) 『左伝』に楚が始めて登場するのは桓公二年の条で、これは楚の武王三一年である。

(10) 山崎道治氏は「前掲論文」二一八頁で「鬬氏(若敖氏)」とされ、また野間文史氏も「前掲論文」九四頁で若敖氏の乱に直接関わったのは鬬氏だけのように言われているが、「楚子成虎ヲ若敖ノ余ト謂フナリ。」(『左伝』昭公一二年)、及びその会箋から成氏も若敖氏の乱に関わったことはまちがいない。

(11) 野間文史「前掲論文」九四頁

(12) 山崎道治「前掲論文」二一七～二一八頁

(13) 野間文史氏は「孫叔敖攷」(『新居浜工業高等専門学校紀要(人文科学編)』一三、一九七七)の七頁で、当時の楚には鬬般と成氏一族、鬬椒と鶩氏一族の二つの派閥があったとされる。しかし、このように割り切って考えられるかどうか疑問と思われる。

(14) 野間文史「孫叔敖攷」七頁でも、「その後、鬬椒はさらに鶩賈をも殺し、遂には王に叛くのである。」とされるだけである。

(15) 地名の現在の場所との対応は、特に断わりがない場合は『中国古今地名大辞典』(台湾商務印書館、民国六四年四版)による。

(16) 『左伝』同年の条によれば、この乱は結果的には公子燮と子儀が殺されて失敗する。

(17) 公子燮は令尹職を求めたが得られず、子儀は秦との成に貢献しながら報いがなかったためと言われている。

(18) 『国語』楚語上

(19) 文崇一『楚文化研究』（中央研究院民族学研究所専刊之十二、一九六七）四七頁によれば武王時代の最初の令尹鬬祁からこの時の子孔（成嘉）まで九人の令尹のうち、六人が若敖氏である。ただ、令尹が実際に政治上の権力を持ってきたと思われる成王時代（これに関しては拙稿「春秋前期における楚の対外発展」（『東海大学紀要文学部』三二、一九七九）二一～二三頁参照）に限ると七人中五人が若敖氏である。

(20) 同様の話は『韓非子』喩老篇、『説苑』正諫篇、『呂氏春秋』重言篇にも見える。

(21) 野間文史氏は「春秋時代における楚国の世族と王権」九四頁で、この三年は子儀の内乱、大飢饉とそれに乗じた西戎・百濮の侵入の混乱に対応するのではないか、と述べておられるが当時の政治状況から見て、王が政治から遠ざけられていたと見る方が妥当と思われる。

(22) 『左伝』によれば伍挙は霊王の時代に活躍しており、蘇従は『左伝』には見当たらない。

(23) この中には当時楚の実権を握っていた若敖氏の意見も入っていたのではないかと思われる。

(24) 孫叔敖の血統については諸説があるが（野間文史「孫叔敖攷」参照）ここでは『左伝』僖公二七年の杜注に従う。

(25) 「彼ノ宗楚ニ競シ」（『左伝』宣公二年）。「彼ノ宗」とは若敖氏を指す。

(26) 野間文史「春秋時代における楚国の世族と王権」九三～九四頁

(27) 『史記』楚世家は鬬椒が讒を受け、これによって誅されることを恐れて叛乱に至ったとしているが、直接の契機はどうあれ乱の原因はもっと根深いものであったと思われる。

(28) 若敖氏がその宗人より構成される私軍を持っていたことは『左伝』僖公二八年の城濮の戦いにおける「若敖の六卒」から明らかである。

(29) 河南省鄭県東

(30) 文崇一『前掲書』五九～六〇頁

(31) これまで目立った公子としては成王時代に令尹になった子元、穆王時代に蓼（河南省固始県東）を滅し、荘王元年に乱を起こした公子燮などがあげられるが、その数は少ない。

(32) 具体的には、王の近親者を任官することによる王の発言力・チェック力の増大、王室自体の権威を高めることなどが考えられる。

(33) 国人層の安定をはかることの重要性に関しては次章以下参照。

(34) 山崎道治氏は「前掲論文」二一九頁において、『韓非子』に見える荘王時代の茅門の法を引いて、この時代に楚は専制君主権の形成へと前進したとされ、また任官基準を明確にするこ

とで中央集権的官僚組織の整備強化をはかった、と述べておられる。しかし、次章以後で述べる荘王の死後の状況から見て、この時代、楚の体制がそこまで進んだとは考えにくい。そのような体制を生み出すには王の私臣が必要であるが、楚の社会がそれを許容する体制になかったことは霊王の時代の例で明らかとなろう。

(35) 増淵龍夫「春秋戦国時代の社会と国家」(『岩波講座　世界歴史4』岩波書店、一九七〇所収)一五七頁

(36) 武王より出、莫敖職はこの屈氏によって独占されている。

(37) 大きな権力のある申公という職についていることの他、『左伝』成公二・七年の条で荘王を諫め、王がこれに従っていることからも信任の厚さがうかがわれる。

(38) 襄公一三年

(39) この公子申だけは右司馬である。

(40) この件に関して『左伝』の記述は、巫臣の出奔を共王二年とし(成公二年)、その一方では巫臣の出奔後その族を子重・子反らが伐った事件を共王即位のすぐ後とし(成公七年)、時間的に混乱している。

(41) 成公二・七年

(42) 荘王は『左伝』の宣公三・五・九・一〇・一一・一二・一三・一五年に見え、一方共王は成公一五・一六年、襄公九・一一年に見える。

(43) 「中心となる」とは軍を率いたり、その戦いを計画することを指す。『左伝』によれば子重は成公二・六・七・九・一六・一七・一八年、襄公三年、子反は成公四・一六年、子辛は成公一八年、襄公元・三年、子囊は襄公五・七・八・一〇・一一・一二年。この他公子申、公子成、公子棠、公子何忌、子庚の名が見える。

(44) 『左伝』成公九・一〇年

(45) 「其ノ大子為リシヤ、師保之ヲ奉ジテ以テ嬰斉ニ朝ジテ側ニタス。」(『左伝』成公九年)

(46) 「楚ニ六間有リ。…其ノ二卿ハ相悪ミ…」(『左伝』成公一六年)

(47) このうち子重と子辛について、野間文史氏は「春秋時代における楚国の世族と王権」九五頁で、この二例は楚における王権と世族との間の大いなる落差の故に前者は敗戦の責任をとって自殺し、後者は罪を得て王に殺された、と述べておられる。しかし、これらはいずれも「楚人」によって死に追いこまれたのである。「楚人」とは『左伝』でその使われている場合を見るに「楚人、陳侯、蔡侯、鄭伯、許男宋ヲ囲ム」(僖公二七年経文)の「楚人」は伝では「楚子諸侯ト宋ヲ囲ム」となり、楚王を指している。その一方、定公五年に呉に都を奪われた楚を救援にきた秦軍が「子浦曰ク、吾レ未ダ呉ノ道ヲ知ラズ。楚人ヲシテ先ヅ呉人ト戦ハ使メテ…」とあるこの「楚人」は、この時楚王は随に逃れていることから王を指しているとは思い難い。このように『左伝』に使われている「楚人」には王から国人までかなり広い概念が含まれ得ることが分かる。さらに既述の僖公二七年の経文に対して会箋は「伝ニ楚子諸侯ト宋ヲ囲ムト曰

フ。則チ楚子自ラ囲ムナリ。楚人ト称スルハ之ヲ略スルナリ。宣九年以後、楚子復略シテ人ト称サズ。」と述べている。従って、野間氏が言われるように殺したその主体を王とするのは問題と思われる。

(48) 増淵龍夫「前掲論文」一五五頁

(49) 国人の他に、王や後述の如く大世族の意志も入っていたことも考えられる。

(50) 『左伝』成公一五年によれば、子囊は晋との盟を破って北進しようとする子反に反対し、道義的に正しい人間と描かれている。

(51) 『左伝』襄公一三年の会箋によれば安徽省廬州府無為州南

(52) 文崇一『前掲書』六〇～六一頁

(53) 『左伝』成公二年の条で斉を救うために出兵しようとする子重が「君弱ク、羣臣先大夫ニ如カズ」と言って罪の軽い囚人を軍役に使い、さらに王卒すべてを派遣している。これは、公子群政権になってそれまでより使用できる兵力が減少したことを暗示しているように思われはしないであろうか。

(54) 『左伝』襄公一八年の「楚子之ヲ聞キ、楊豚尹宣ヲシテ子庚ニ告ゲ使メテ曰ク、国人謂フ不穀社稷ヲ主リテ師ヲ出サズ礼ニ従ハズト。…大夫之ヲ図レト。」はこの一例である。

(55) 『左伝』襄公一八年の会箋は『釈文』を引いて薳と蔿は通用したと述べている。

(56) 野間文史「春秋時代における楚国の世族と王権」九五～九六頁

(57) 「王之ヲ見ル毎ニ必ズ泣ク」「国将ニ討ゼントス」の語は、王が子南を殺すことにあまり積極的でない感じを与えるように思われる。

(58) 『左伝』昭公七年で芋尹申無宇は霊王の私臣を養う態度を身分秩序を破壊するものとして非難している。

(59) 大世族に実権があるこの時期に公子圍が令尹に就任した事情は不明である。後述するように公子圍が薳罷と結んでいたことと何か関係があることも考えられる。

(60) 『史記』楚世家・十二諸侯年表は共に圍の令尹就任は郟敖三年（魯の襄公三一年）とする。

(61) 襄公二九・三〇・三一年、昭公元年

(62) 同年の『左伝』によれば、圍はこれ以前から公子黒肱と伯州犂を除こうとしていた。

(63) 同年の会箋には「郟尹ハ郟竟ヲ治スル大夫ナリ」とあり、自分の治める地を采邑とすることはできなかったように思われる。

(64) この章華を杜注は地名に、会箋は高丘の意に解している。

(65) 『左伝』昭公四年

(66) 増淵龍夫「戦国官僚制の一性格」（『中国古代の社会と国家』弘文堂、一九六〇所収）二〇七頁

(67) 『左伝』昭公一三年の伝文「職ヲ挙グ」に対する杜注

(68) 伝文では「荆」とあり、杜注は荆山に解するが会箋に従った。

(69) 武王の時代より行なわれていたことは『左伝』荘公一八年

より分かる。

(70) 昭公四・七・一一年

(71) 西不羹は河南省襄城県東南、東不羹は同じく舞陽県西北。『左伝』昭公一二年の杜注も不羹を二国に解している。

(72) 杜注は蘧氏、許圉・蔡洧・蔓成然の族とするも会箋に従った。

(73) 同年の『左伝』によれば、この乱を起こすに当たり棄疾らが「陳蔡ノ人ニ依ルニ国セントスルヲ以テス」とある如く、陳や蔡の人の国を復したいという希望をつかんでこの乱に参加させるに至ったことが分かる。

(74) 子革（然丹）は鄭の公孫であり、このような他国からの人物が右尹という高位についていることも（他の時期にも皆無ではないが）霊王の政策の一つの表われと見ることができよう。

(75) 『左伝』昭公一三年

(76) 増淵龍夫「春秋戦国時代の社会と国家」一五七頁

(77) 『左伝』昭公一三年

(78) 『左伝』昭公一三年によれば、棄疾は誰も霊王の生死を知らないのに乗じて王が来たと告げさせ、子干と子皙には王が来たことによって動揺した国人が棄疾を殺してここにもやってくると告げさせ、二人を自殺に追いこんでいる。

(79) 『左伝』昭公一三年の会箋によれば、注(78)に記した策謀の後始末である。

(80) 武王時代は王の指導力がかなり大きかったが、文王時代の閻氏の乱を境として成王時代に入ると完全に王は大世族（特に鬬氏・成氏）に圧倒されてしまったように思われる。（拙稿「春秋前期における楚の対外発展」二五～二七頁参照）

（本稿は、昭和五四年度東海大学総合研究機構研究奨励補助金による研究成果の一部である。）